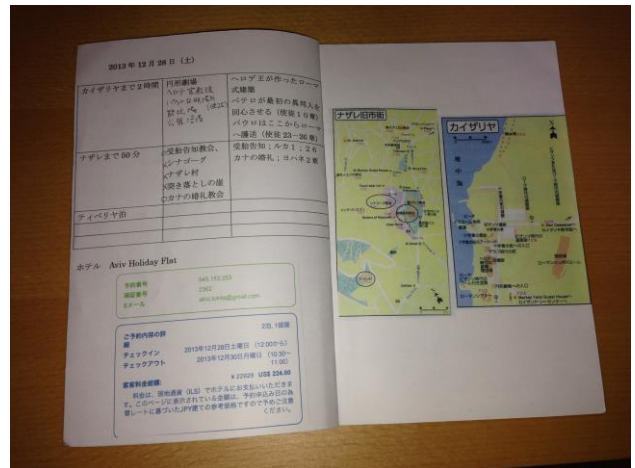


はじめてのイスラエル旅行記(2013年12月27日～2014年1月6日)

いつかはイスラエルに行きたいと願っていた私たち夫婦は、一緒に行こうという息子に背中を押されて、念願のイスラエル旅行を実現した。なるべく安く抑えるため、ホテルは息子がネットで検索して比較的安いホテルと航空券を予約してくれた。現地での行動はレンタカーとし、私がネットで予約した。初めてのイスラエルでレンタカーの運転は正直不安だったが、自分たちで行きたいところに自由に行けることを優先した。(後述するが、もう二度とイスラエルでは運転したくないというような経験をした。まあそれもいい思い出になったが。)

レンタカーのカーナビは不安だったので、イスラエルの地図をダウンロードした iPad mini と GPS を持っていくことにした。息子に助手席でナビゲートしてもらおう。

行きたいところをピックアップし、順路を決め、修学旅行のような地図付き行程表を作成した。(さすがに持ち物とかは書いてない)



今回の旅行ルートは以下のとおり。

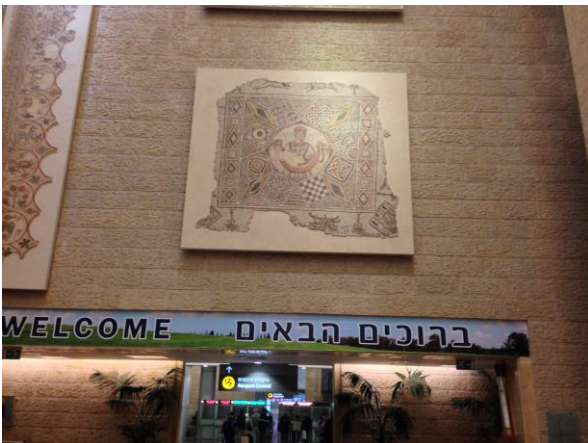
- 12月27日(金) 成田発イスタンブール経由でテルアビブ着
- 12月28日(土) カイザリヤ、ナザレ、カナを通してティベリヤへ
- 12月29日(日) ガリラヤ湖周辺観光
- 12月30日(月) 死海まで南下し、クムラン、エンゲディ、マサダ等見学
- 12月31日(火) ネゲブ砂漠ミツペー・ラモーンへ
- 1月1日(水) ベツレヘム経由エルサレムへ
- 1月2日(木)、3日(金) エルサレム観光
- 1月4日(土) テルアビブへ、そして帰国

2013 年 12 月 27 日(金)深夜 ベングリオン空港到着。



さっそくヘブライ語が目につく。ヘブライ語が近代的なビルに不釣り合いな感じがした。広告を見ると右から左へ書くヘブライ語の中に、アルファベットやアラビア数字が左から右に混じっている。街中でも以外に英語併記なしが多く、イスラエルで生活するにはヘブライ語が読めないと無理だろう。

予約しておいたレンタカーでテルアビブ市内へ。息子が助手席で GPS+ iPad でナビゲートしてくれたが、初めての地で深夜の運転は緊張する。ホテルがなかなか見つからず、狭い一方通行の道をぐるぐる回ってようやくたどり着いた。小さなホテルで、3 人で一泊して 162 ドル。



12 月 28 日(土)

ホテルのレストランで朝食。イスラエル人が男女共に特徴的なのに気付く。

ホテルから歩いて地中海に面した海岸に向かう。さすがにテルアビブは近代的な街だ。





車でカイザリヤへ向かう。途中までは片側 3 車線の快適な道路だ。途中、マイクロソフトなどの IT 企業のビルがあった。イスラエルはハイテク産業と古くからの宗教と文化が共存する国だ。



円形劇場

カイザリヤの円形劇場、競技場、公衆浴場、ヘロデ宮殿跡を見学。ヘロデ大王がローマに倣って作ったものだ。

実際にここでローマのような戦車競走が行われたらしい。

パウロがローマに護送される直前に総督フェストとアグリッパ王の尋問を受けたのもこの場所。(使徒 25, 26 章)



ヘロデ王の宮殿跡



パウロが尋問を受けた場所



ピラトの名が刻まれた石板

ペテロが異邦人伝道に目が開かれたのもここカイザリヤだった。

またここで、イエスを処刑したポンテオ・ピラトの名を刻んだ石板が発見されている。



ナザレに向かう途中の道路は大変な渋滞。道が狭いうえに路上駐車が多い。運転マナーも悪い。割り込みは当たり前。クラクションは鳴りっぱなし。とても緊張して非常に疲れたが、郷に入れば郷に従え、強引に割り込まないととにかく前に進めない。それが当たり前ならばトラブルも起きないのかもしれない。

なんとか受胎告知教会に到着。

その国の文化に合わせた聖母子画が飾られており、日本から贈られた着物を着た聖母子画もあった。

そのとなりが聖ヨセフ教会。



マリヤが御使いから告知を受けた場所は洞窟であった。当時のナザレは貧しい村で、洞窟で暮らしていたらしい。今回初めてそれを知った。

時間が足りなくなって、シナゴーク、ナザレ村、突き落としの崖には行けなかった。

カナの婚礼教会に着いたときは雨が降り、暗くなっている中に入れなかった。近くの土産屋ではワインが売っていた。



ナザレの住居跡



ティベリヤのホテルに行く。2泊、3人で224ドル。

ナザレからガリラヤ湖まで車で1時間以上、聖書では簡単に書いてあるが、歩いたら相当の距離。昔の人は良く歩いたな。

12月29日(日)



キブツでイエス時代の舟を見学。ガリラヤ湖が干ばつで水位が下がったときに見つかった。そのままでは崩れるので、固めて引き上げたそう。こんな舟に12弟子とイエス様に乗って嵐が来たら確かに怖いだろうと思う。

ペテロ召命教会(別名ペテロ首位権の教会)はガリラヤ湖のほとりに建つ小さな教会。復活したイエス様が弟子たちに食事をふるまったとされる岩の上に建っている。(ヨハネ 21 章)



その岩に手をあてて祈っている人もいた。椅子に座って静かに祈っていると、3度も主イエス様を裏切ったペテロを咎めずに「私を愛するか」と問い、励ましたイエス様の愛が心に染みしてくる。



白装束で裸足の巡礼者のような人たちがいたが、皆スマホやタブレットで写真を撮っていたのはなんだか奇妙。



昼食は「ペテロの魚」を食べる。白身で淡泊だがまあおいしい。



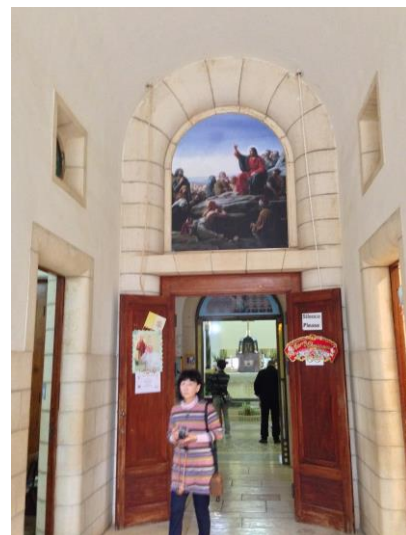
カペナウムは「THE TOWN OF JESUS」と書かれていた。
そこで飲んだざくろジュースはおいしかった。
ペテロの家の跡と、近くにイエス様が宣教を開始したシナゴークの跡に建てられた4世紀のシナゴークの遺跡があった。



イエス様はこの会堂から宣教を始められた。
この遺跡からは、ユダヤ教のシンボルを使った装飾が発見されている。



小高い丘の上に「山上の垂訓教会」がある。こんなところから湖を見下ろしながら、イエス様は大勢の群衆にみことばを語ったのだなと感慨にふけるも、そのほか特筆すべきことは何もない場所だ。





山の上にある正統派ユダヤ人の町ツファトへ行く。山に着くと雨と雷。律法に従い男子はみな鬢の毛を伸ばしている。

12月30日(月)

昨日は閉館していた「パンの奇跡教会」に朝一番で出かける。

パンの奇跡を行った場所だと言われている。静かな礼拝堂で、イエス様がパンを分け与える様子を思い浮かべていると、人々の驚きのざわめきが聞こえてくるようで感動した。

ここが本当にその場所かどうかはさておき、そのように瞑想できる場所があることがイスラエルに来た恵みだと思う。

五つのパンと二匹の魚をモチーフにしたお土産を買う。



ガリラヤから車で一気に死海まで南下する。途中、ときたま現れるオアシスを除いて、全く緑の無い荒野が延々と続く。荒野というものがどういうものか初めて見た。厳しい自然、水は文字通りいのちである。



道がまっすぐで広く、車も少ないので、息子と妻に少し運転をしてもらった。こちらの人はかなりスピードを出していたが、妻も負けてはいなかった。

エリコに寄る計画だったが、時間が無さそうなので諦める。

1947年に紀元前の聖書を含む死海写本が発見されたクムラン遺跡に行く。こんな岩だらけ何もないところの洞窟から偶然見つかったなんてほんとに奇跡的だ。2000年も保存されていたのは気候のおかげでもある。

エッセネ派の人々もここで生活していたなんて驚きだ。



死海写本が見つかった洞窟



さらに車を走らせると左手に死海が見えてきた。死海という名前とは裏腹に青くてとても綺麗で、周りに溜まった塩の白とコントラストが良い。生物がないので澄んでいるのだろう、湖面が鏡のように空と雲を写している。意外だった。



岩たぬき

エン・ゲディ国立公園はオアシスで、岩狸やアイベックスに出会った。ダビデがサウル王から逃れて隠れていたところである。(サムエル記上)

岩肌に洞穴が見えたが、こんなところにダビデは隠れていたのだろうか。

ダビデの滝という名前の滝があった。

標高が低いせいか、岩場をしばらく歩いていても疲れを感じない。

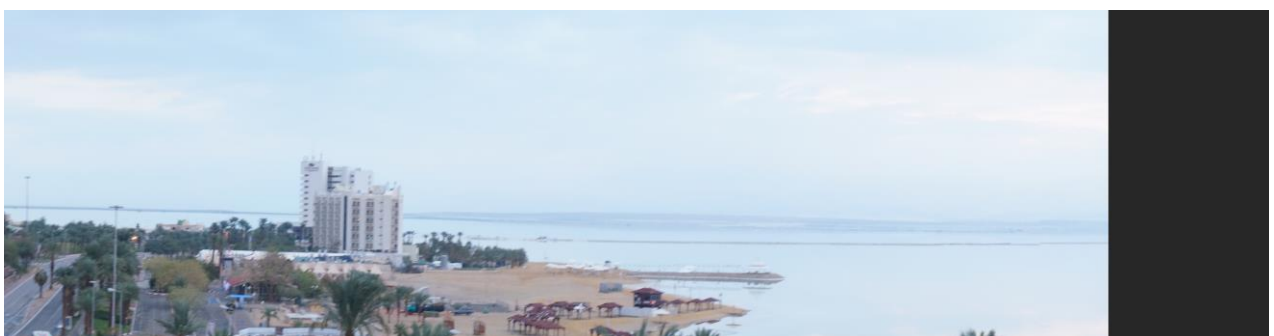


アイベックス



エン・ボケックのホテルに早めに到着。死海沿岸のリゾートホテルだ。スパがあり、死海の水の風呂もある。

1泊、3人で356ドル。今回の旅では最も高いホテル。

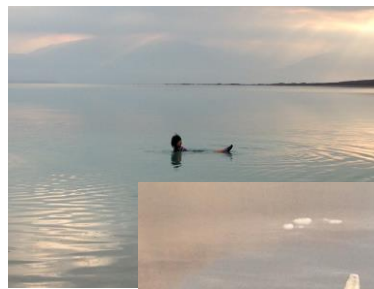




ホテルにある安息日用エレベーター。
ボタンを押さなくてもすべての階に止まる。

12月31日(火)

朝、妻と息子は死海で浮かった。
沿岸で塩を削り取って土産に持ち帰った。



マサダの要塞に登る。息子は徒歩で、私と妻はロープウェイで登る。

マサダはヘロデ王が宮殿として作ったもので、食料貯蔵庫、貯水池があり、水は川の水をロバを使ってくみ上げていたという。こんな砂漠の真ん中のしかも山の上に宮殿を造ってしまうヘロデ王はどれほど権力者だったかがわかる。

このマサダを有名にしたのは、AD70年にローマ軍に抵抗してユダヤ人900人以上が2年間ここに立て籠

もったという史実である。さすがのローマ軍も2年間かかって制圧した。そのとき900人以上のユダヤ人は自決した。

それにしても上からの眺めは絶景である。



貯蔵庫や貯水池が完備され、2年間の籠城を可能にした。
しかし、ローマ軍が外側に塔を築きついに攻略されてしまう。
「マサダを忘れるな」これが今でもユダヤ人の合言葉である。



ローマ軍に破られた様子



マサダで3時間過ごしたので、今夜の宿泊地、ネゲブ砂漠のミツペー・ラモーンについたのは5時半で暗くなっていた。



ラモーンクレータは1億年前の地殻変動と雨水の浸食によってできた圈谷。

ミツペー・ラモーンへの3時間の道はずっと岩地、岩山。

エジプトを出たユダヤ人はこのような荒野を40年もさまよった。

時速100Kでも追い越される！しかし前を走る車が突然減速した。雨が降っていて(それほどでも無い雨量だったが)、低いところでは道路が冠水してしまったようだ。後で調べると、岩山なので雨水が谷に集まり、バスを押し流すほどの濁流になることもあるらしい。これがイエスのたとえ話の、砂の上の家を押し流す洪水なのだと分かった。日本人がイメージする洪水とは違う。



宿泊は3名1泊で240ドル。